

<< Coffee break Talk.13 “気合い” >>

支部長 今林光秀

九州支部会員の皆様お元気にお過ごしでしょうか。今日は“気合い”と題してお話します。暑い毎日なのに暑苦しい根性論なんかやめてくれと思われた方、“気合い”について考え違いをされています。アニマル浜口氏「気合だ気合だ気合だあ〜」でいかにも熱く強く集中して頑張ることが気合と思われているかも知れませんが、幼少期から青春期に剣道をやってきた自分にとって“気合い”は別概念。読んで字の如く“気”が“合う”さまと考えます。“気”とは人間が発する自己意思のエネルギーで、それが相手の“気”と合うことでより高まる。例えば相撲の立会いは両力士の“気”が“合う”ことで成り立ちます。“気合い”とは決して熱〜い根性論ではないのです。剣道には“気剣体一致”という言葉があります。自分の竹刀が相手の面に当たっただけでは一本でなく、そこに気と体の真の一致があって初めて一本と叩き込まれました。“道”と名のつく武道は“気合い”なんです。ここで一つ素敵な思い出話をします。

2002年元旦に東京のホテルオークラにてアントニオ猪木氏と偶然すれ違い、振り返って「握手して下さい」と声掛けたところ、嫌な顔ひとつせず私をしっかりと見て力強く温かい握手。強く温かくて優しい“気”を感じて「ありがとうございました」と“気”で御礼。一緒に握手してもらった妻のお腹には新しい命(息子)も、「本当に強い人は温かくて優しい!」と感心しました。



[The Okura Tokyo; 新建築 2019.11]

実は、この“気合い”の概念は構造設計にも大切だと思います。構造設計者の“気”が発注者や建築/設備や施工者の“気”と合うことでより良い建築になる。建築家の気に押されてしまい構造の気を発することをせずに臆してしまっているのは構造の正しい姿ではなく、その想いから“構造設計は気合いだ”と私は思います。これは決して「夜も寝ずに頑張るって期限までに構造計算奮闘して納める。」といったネガティブ根性論ではなく、構造設計のあるべき姿であり、AIなど入り込む余地のない人間にしかできない尊いものと考えています。

構造の“気合い”が特に求められるのは責任ある建築士としての説明責任です。構造性能は発注者のために設定されるべきもので、発注者に構造設計者が説明(気を発す)して発注者と一緒に構造性能を決める(気合い)ことが大切です。最低基準でしかない建築基準法を守って法適合確認をクリアするだけでは責任ある建築士としては不十分で、建築士法による発注者への設計内容説明義務が必須。さらに、設計行為は契約に則った業務であり、民法の善管注意義務による発注者説明もMUSTです。それをしていないと、もし将来「聞いてなかった」と言われたらお互いに悲劇です。

構造にも“気合い”が大切なのだという事をお分かりいただけましたでしょうか。能登半島地震もあり、今春以降に国が検討中の地域係見直しへの対応や、学会・JSCAが推し進めている性能設計の取組みなど我々構造がイニシアチブを取るべきものは多々あります。構造設計者がしっかりと発注者に説明して“気合い”に至り、建築のあるべき姿とする技術者としての責務があります。「構造から社会を変える」くらいの気概を持って、前向きに行きましょう。“気合いだ、気合いだ、気合いだあ〜!!”

「2024年8月18日 Coffeeとの“気合い”もまた格別」